（３）団体からの事例の紹介及び質疑応答

・社団法人大川村ふるさとむら公社

司会：　最後は、「大川村ふるさとむら公社」さんです。「土佐はちきん地鶏を活用した新しい産業の展開」についての発表になります。

Ｇさん：　まず、土佐はちきん地鶏と関わってきた経過は、平成 18 年７月に大川村内にある農事組合法人の高知県畜産試験場視察から始まり、９月７日から土佐はちきん地鶏飼育の実証試験が開始され、90 日間で 270 羽のうち 263 羽が出荷されました。平成 18 年９月に大川村から土佐はちきん地鶏調査研究事業で委託を受けてスタートしました。平成 18 年 10 月 20 日には、大川村が高知県土佐はちきん地鶏振興協議会の会員になりました。平成 19 年２月には２回目の調査が始まり、平成 19 年４月１日から「大川村ふるさとむら公社」でもはちきん地鶏の業務委託を受けて、飼育鶏舎整備と飼育管理に係る技術指導、飼育経営に係る指導を始め、職員がはちきん地鶏の飼育をスタートしました。

施設は（大川村）白滝（地区）で、標高 800 メートルくらいのところに、水耕栽培の園芸ハウスで一部使われてないハウスがあり、日光が入りやすい施設の中にあえて鶏を飼育する、逆に言えば鶏が飼えるような施設づくりを平成 19 年からスタートして、その年は年間約 4,000 羽弱を出荷することができました。この１年間は土佐はちきん地鶏の性格、性質的なもの、技術を習得しながらきました。それと同時に平成 19 年９月にははちきん地鶏の種鶏場の設置が決定されました。そこから、幟や桃太郎旗にも「大川村から」と名前を入れさせていただき、県のはちきん地鶏の取り組みの中でも、大川村は命運をかけた取り組みとしている現状にあります。施設も生産活動の増大を狙ってだんだん拡大しています。現在も進行中で、県のいろいろな事業もいただきながら仕事を進めています。その中で、平成 20 年には 25,000 羽の出荷になりました。平成 25 年には 10 万羽以上の生産という目標を掲げ、種鶏の方も進めています。高知県土佐はちきん地鶏振興協議会の協議の中で、生産と同時に処理場、流通、販売を進めていくということで進んでいます。この協議会の会員さんは現在 17 団体になっており、はちきん地鶏事業振興に携わっていただいています。平成 21 年度になり、これから羽数がどんどん増えていくということで、新しいはちきん地鶏の専門会社として、４月に「株式会社むらびと本舗」を設立して、はちきん地鶏を振興させるための会社組織運営も稼動しています。

今このはちきん地鶏が求められてきていることをすごく感じる面もいろいろあります。今回地産外商公社もできて、それと一緒にこれから先本当に進んでいけるのではないか、進んでいってもらいたいとすごく期待もありますし、一緒に行動しなけれ

ばいけないという気持ちで現在取り組んでいます。何年か前から県の畜産振興課のタイアップして進めさせていただく中で、東京事務所や大阪事務所からいろいろな情報も入ってきています。高知は商売上手とは言えないと思いますので、会員で作ったものをいかに処理して、商売していくのかが課題で、村の命運をかけた取り組みですので、「これは絶対でないといかん」という思いでやっています。はちきん地鶏と大川村の黒牛は昔から一貫経営できています。

Ｈさん： 大川村は高知県の最北端、県都高知市の真北に位置し、北は愛媛県と接しています。周辺は 1,000 メートル以上の山々に囲まれ、地域の中央部を流れる吉野川に南北に二分されてＶ字型をなす、急峻で平坦地が極めて少ない山村です。土佐はちきん地鶏の飼育場所は、夏場は 30 度を超え、冬場はマイナス 10 度近くになる環境的にとても厳しい場所で、人口は昭和 36 年をピークに年々減少し、平成 21 年８月 31 日現在、離島を除く日本一人口の少ない村になりました。

基幹産業は、林業や畜産の第一次産業です。林業では各種補助事業を取り入れた林業活性化に関する計画があり、畜産では大川牛として黒毛和種を飼育しています。しかし高齢化、後継者不足で次第に減少しています。現状のままでは産業確保等が十分と言えないため、対応策として、村内に新たな産業や事業を創出し、地域経済の活性化を図る必要性が出てきました。高齢者でも従事することができ、かつ所得確保につながる農業、また若者の定住、雇用の場の確保、畜産業の復興のため、平成 18 年度より土佐はちきん地鶏の飼育試験を始めました。まだ始まったばかりの事業ですので問題も多々ありますが、村の活性化につながるように事業の復興を推進したいと考えています。

飼育と生産面については、現在土佐はちきん地鶏は高知県の大川村と芸西村の２カ所で飼育され、大川村では孵卵から出荷まで一貫体制で行っています。また独自にＢＭＷ技術を導入し、悪臭の軽減や育成率、飼料要求率、産卵率の向上等に努めています。土佐はちきん地鶏料理は、謝肉祭で販売されている地鶏の丸焼き、地鶏のたたき、他にも加工品としてカレーや炊き込みご飯の素などがあり、販売しています。

今後の事業予定としては、21 年度は堆肥舎や合併浄化槽、種鶏、親鶏の育成舎や焼却炉の設置など、22 年度は食鳥の処理場、23 年度には施設場内の舗装や浄化槽の設置を考えています。生産面では、21 年度には７万羽体制、23 年度には 10 万羽体制を目指しています。

Ｉさん： 最後に、現在の課題は、まず生産設備の整備が急務です。はちきん地鶏は、県が商標登録を持った土佐のブランド鶏として確立していくために、県畜産試験場が１㎡辺り８羽以下と決めて飼育マニュアルに沿って飼っています。夏場は、例えば満員電車に肩すりあわせるぐらいに積まれるとストレスを感じます。もう少しゆっくり飼うために生産ハウス、生産面積が必要になってきます。これをいかに確保するかが一番の課題だと思っています。それから、工場で作る商品であれば統一されたものができると思いますが、鶏ですので、餌を食べる鶏と食べない鶏とバラツキが出てきます。商

品として考えた場合、このバラツキをできるだけなくさないと売りにくい商品になります。また最終的にユーザーから長い間愛される商品にするには、できるだけ統一されたものにしないといけないという大きな課題があります。（これの）対応策はゆっくり、のんびりと飼育できるハウスの面積に（するということに）いきつきます。２番目の課題として、今後県内各地で県のブランド鶏として飼育していくには、鳥インフルエンザのようなアクシデントが起きないとは限りませんので、最低半径 15 キロ以上空いた所で、何カ所かで飼うことにより、万が一の場合でも全滅を避けられることになります。県内各地で飼われる農家を探してもらい、全滅の危機にさらされないように県にお願いしないといけないと思いますし、そうする場合にきちんと統一された飼育マニュアル、どこで飼っても同じ様な大きさで、同じ味がするというものでないと、一つの商品と言えないと思います。県から「平成 25 年度までに 20 万羽は超せ」と大命題を突きつけられていますので、それには生産農家を増やしてもらわないと大川だけでは対応できません。県が主導になって各地で生産農家を増やしてもらい、県の一つの産業として確立するために、まず大前提は完全に統一された飼育マニュアル、それに則ってどこで飼っても同じものを作ることだと思います。この大きな二つの課題をクリアした時に、目標が達成できるものと考えています。

知事：　Ｇさんが「社会のニーズを感じ始めている」とおっしゃいましたが、確かにはちきん地鶏は、段々売れているんですよね。当たり前ですが、ブロイラーよりいい鶏で、お値段もある程度で手に入ることもあって、バランスが良い点においては、本県にとって非常に大切な産物と言いますか、ものだと思います。もう一つ、Ｈさんから説明いただいた「高齢化が進んでいる、そういう中にあっても所得確保に繋がるような産品」、確かにこれから高知県、中山間の振興を図っていくためには、いかに探していくのかが大切だと思います。そんなにものすごい重労働をしなくても何かができる、作ることのできる作物を探さなければいけないと思いますし、比較的簡単に飼うことができて、所得を稼ぐことができる商品が必要です。中山間の作物に期待をしています。例えば薬草にも期待しています。庭先で育てることができて、しかも単価が高い。牧野植物園が新しいものを開発してくれましたので、それをどうやって広めるかについて、今一生懸命努力しているところです。

そしてもう一つは、確かにこの鶏は非常に有効な、今後高知県の中山間のスターになってくれる産物だと思います。Ｉさんから「20 万羽という命題」という話でしたが、これがやり遂げられればいろいろな意味で多くの人の所得向上に少しでも繋がっていくのではないかと思っています。県としても販路開拓とともに、ご指摘を受けましたハウス面積の拡大についても努力をしないといけないと思います。また、県内各地に拡げていく必要があるため、飼育マニュアルの統一ということ、具体的に課題をご指摘いただきましたので、その点を踏まえて今後対応を進めさせていただきたいと思います。本当にいいお話しを教えていただき、ありがとうございました。

黒牛、そして赤牛、高知県の和牛、それぞれ育てていかなければならないと思いますが、今価格が低下して大変であろうかと思います。そういう問題に対してどう対処

していくのかについて、牛で期待できるところは、鶏もそうですが、食卓の主役になり得るもので、大きく育った時の儲けと言いますか、全体としての事業量は非常に大きくなり得るものだという期待感は大きいと思います。ただ残念ながら本県の場合は、特に牛に関していえば、生産量が他県に比べて大きくないと思います。まずは価格低迷の中にあっても、生産量をいかに維持していくのかに力を入れることが第一だと思いますし、さらに言えば、今後生産量拡大のためにどういうことができるのか、少なくても今の危機をどう乗り越えるのかが第一。そしてその上で、生産の面、流通の面、販売の面、それぞれにおいて対応策を講じて、畜産、特に牛を高知県に残していきたいと思っています。そんなに簡単な道ではないかもしれませんが、今後とも取り組みは進めていきたいと思います。

農業振興部長：　大川村のはちきん地鶏の取り組みは、非常に熱心に、本当に売れるものか、生産をどう作っていくのかという視点で積み上げられていることに、感銘を受けました。嶺北全体は地形が山間部であり、耕地が少ない中でいろいろな工夫をされてやっていらっしゃいます。高知県は農業で言えば園芸農業で、成果物をそのまま県外に売って稼いできた農業県ですが、嶺北は少し違うかなという印象を持っていまして、この不利な地形をさらに活用して、米粉、碁石茶、それぞれの地域の特産品を発掘しながら、マーケットを見て生産されている印象を持っています。私は３月まで東京事務所にいました。その時にはちきん地鶏を熱心に売りに来ていらっしゃいましたし、碁石茶もですが、売ること、売れるものをどう作っていくかを非常に考えられていると思います。高知県の園芸農業の中でも特異な農業、あるいは一次産業の形態を持ち、少し古い言い方になるかもしれませんが、産業そのものが単品ではなく、販売・流通・生産を垂直型に統合する中で地域の生業なり、産業を考えていこうときちんと捉えられている地域だと非常に期待もしていますし、楽しみにもしています。可能な応援はさせていただきますので、がんばって一緒にやっていきたいと思います。よろしくお願いします。